母子生活支援施設における社会福祉士実習プログラミングの実際

ー新カリキュラム対応のモデルプログラム創出プロセスに焦点化してー

○　関西学院子どもセンター　中島　尚美（7646）

廣瀬　みどり（社会福祉法人みおつくし福祉会 東さくら園・8306）

キーワード：社会福祉士実習プログラミング・母子生活支援施設実習・実習マネジメント能力

１．研 究 目 的

本研究の目的は､母子生活支援施設における社会福祉士実習プログラミングに焦点化し、新カリキュラム対応のモデルプログラムを養成校である大学との協働によって作成していくにあたり、施設側がプログラミング能力のみならず実習マネジメント能力をいかに働かせながら作成に至ったのかを事例的にとりあげ、そのプロセスを分析することによって、実習プログラミングの有効性と課題を探ることにある。

本研究の背景として，まず、A 大学の実習指導体制において、2003 年度より進められてきた測定尺度開発の研究からの流れを汲み､「実習先担当者－学生－養成校の教員」の三者にメリットのある相互フィードバックシステムの開発的研究を基盤として､2010 年度からの新カリキュラム導入に向けて、領域別合同研究会を重ねて開催し、実習プログラミングシート作成につながる「モデルプログラム」作成作業を 2009 年度から協働で行ってきたことが挙げられる。二つ目としては、母子生活支援施設実習が抱える課題が挙げられる。社会福祉士資格を有する実習指導者の確保、保育士実習との区別、個人情報保護の観点からの実習生への情報開示、などに課題を抱えている。一方で、児童福祉法に基づく唯一、親子で入所する施設であり､「家族」を総合的包括的に支援するファミリーソーシャルワークが展開されていること、措置ではなく「契約」に基づいて入所していることから自立支援が重要視されていること、また DV や虐待対応にあたり高い専門性を求められる中で、職員自らの業務の見直しや業務の中にソーシャルワーク実践の意識化と理論付けをしていくことが求められてきたことが背景に挙げられる。ここで示すＢ母子生活支援施設（以下Ｂ施設）においても、ファミリーソーシャルワークの実践現場であることについて、各部署職員の間で意識差が生じているという課題が認められていた。

２．研究の視点および方法

①養成校である大学側からの働きかけ：A 大学では、先述の領域別合同研究会を開催し、現場で展開されるソーシャルワークの共通基盤項目を確認した上で、領域独自の支援の特徴や専門性、課題を把握し、実習プログラミングにも反映できるように検討を行った。また､個別にモデルプログラムとしてたたき台の作成依頼をしたＢ施設側に対しては､「新カリキュラム実習概要」を記載した文書を作成し、施設内周知の徹底を依頼した。さらに、共通基盤項目を記載した「たたき台」の下敷きとなるプログラミングシートを提示した。

②Ｂ施設内での働きかけ：母子支援員、少年指導員、保育士の三職種の主担当者が社会

福祉士実習の内容協議を目的としたコア会議を３回実施した。それに伴い同職種内では、支援における特徴と専門性を整理し意味づける作業を通して実習項目の抽出作業に繋げた。

３．倫理的配慮

実習項目抽出作業およびモデルプログラム作成作業においては、実習先の個別事例が特定されるような情報は削除し、倫理的配慮を施した。

４．研 究 結 果（モデルプログラム創出プロセス）

第１段階　共通認識の形成とコア会議の波長合わせ

まずＢ施設における実習指導の目標と基本方針を改めて確認し、施設長のリーダーシップの下にもたれた第１回コア会議では、各部署で実践している業務を実習生に示し、その業務において必要とされる価値･知識･技術および理論付けについて協議し整理を行った。

第２段階　「たたき台」の具体的内容検討

第２回コア会議では、実習プログラミングシートのたたき台に沿って実習生がケアワークの視点とソーシャルワークの視点双方を理解し実習受け入れ先の社会的な責任や専門性の維持・向上に繋げることに焦点化し、各部署の課題・内容・指導上の留意点を協議した。

第３段階　達成課題の明確化と実習展開の検討

第３回コア会議では、各部署から提出のあったプログラミングシートを基に、達成課題を明確化し、実習全体を前期・中期・後期に分けて、どの時期に何を伝えていくべきかを検討した。また実習生が現場で対人援助の経験を通して、直接処遇の魅力を感じ、実習へのモチベーションを高め、達成感を実感するにはどのような指導が有効であるのかを検討した。それには、各部署での指導者の支援が確固たる専門性を有すること、また利用者への関わりや言葉がけは、全てにその家族全体を見据えたソーシャルワークを基盤とした支援であることを確認した。さらに実習生には、どのような援助技術や実践理論に根拠をおいて支援を行っているかを目に見える形で伝えることが重要であることを共通認識とした。

5. 考 察

実習指導者テキストによると指導者に要求される能力は、「実習マネジメント能力」「実習プログラミング能力」「実習スーパービジョン能力」「社会福祉士像の伝達能力」の４つとされる。特に先の創出プロセスが示すように、実習プログラミング作業に着手する前提としての「実習受け入れに対する組織としての共通認識」を基盤とすることが最重要課題であり、それには実習マネジメント能力が必要不可欠である。母子生活支援施設運営指針（平成 24 年 4 月）の「実習生の受入れ」項目においても、「受入れの意義や方針を全職員が理解すること」が明記されている。実習の受け手は要件を満たした実習指導者だけではないということである。施設職員全員が目指す方向性をひとつにすることで、役割分担が明白になり、実習展開の状況を把握し情報を共有することでより効果的な結果をもたらすのである。今回のモデルプログラム作成を通して、職員がソーシャルワークの視点を共通認識し行動の理論化の重要性を意識できたことは､施設機能にとっても意義深いと考える。